

四十九 お茶

大正十四年の正月だったと思います。侍従武官長奈良武次陸軍大将からご紹介を受けたことのある津野田陸軍少将を東京のご自宅に訪問したことがあったのです。正月だったので屠蘇を出されたのです。それが大きな盃の上に中くらいの盃、その上に小さい盃がのせてあってそれに屠蘇が入れてあったのです。それを台の上に乗せて出されたのです。私は礼儀作法も何も知らない一介の青二才ですので、どうしたらよいか全く困ってしまったのです。しかし仕方がないものですから、恐る恐る屠蘇の入っている一番上の小さな盃を取り、うやうやしくいただいたのでした。姉のところにもどつて姉に聞いたところそれでよかったですと教えられ、ほっとしたのでした。それは三方の上に三ツ重ねの盃をのせてあったのだそうです。

あちこち講演に行っていると、時々抹茶を出されることがあるのです。茶の作法を知らないでひやひやしたことがよくあったのです。それで恥をかかないようにと思い、幸い私が京都成安女子学院で速記を教えた時、一番上手だった生徒が京都の伏見でお茶の先生をしていることがわかり、ときどきそこに行つて習っていたのでした。その人は榎本宗宏（輔規子）という人で裏千家では最高といわれるほどの資格を持っている人でした。毎年正月初釜が開かれる時は特別に招かれて出席していたのでした。ご主人は榎本華